

午後Ⅰ試験

問1

問1では、オープンAPI態勢を題材として、オープンAPI態勢の各機能において生じるリスク、及びリスクに応じたコントロール、また、それらのコントロールの有効性を検証するために必要な監査証跡と監査手続について出題した。全体として正答率は平均的であった。

設問2は、(ii)の正答率が低かった。新旧両方のAPIを継続して存続させる旨の解答が散見された。IBサービスの向上など、APIの仕様を変更する意味及び必要性を理解してほしい。

設問3は、正答率が平均的であった。APIサーバの負荷状況、接続遮断などの各種イベント発生状況、オープンAPI経由のアクセス状況がまとめられたオープンAPI運用報告書が、監査証拠として最も適しているが、各種のログといった明確でない解答が少なからず見られた。適切な監査証拠を特定し、それを基に監査手続を行う能力は監査人にとって必須であるので、ぜひ身に付けてほしい。

設問4は、やや正答率が低かった。一般的なリスクベースアプローチについての解答が多く見られた。問題文に“アクセストークンに基づくリスクベースアプローチ”とあるので、趣旨に沿って解答してほしい。

問2

問2では、クラウドサービスを利用したシステムを題材として、クラウドサービスを利用する際のリスクを理解した上で、IaaSを利用中の組織において実施すべきコントロールや監査手続について出題した。全体として正答率は平均的であった。

設問2は、正答率が平均的であった。ソフトウェアの脆弱性を突いたサイバー攻撃による情報漏えいやシステム障害が発生するリスクに対しては、脆弱性の緊急度に応じた適時の対処が必要になることを理解してほしい。

設問3は、正答率が平均的であった。システム管理者権限の操作ログが暗号化され、アクセス制限され、保管されることは重要であるが、これに加えて、システム管理者が不正操作を隠蔽するために操作ログを改ざんする、誤って操作ログを変更又は削除するリスクを想定し、システム管理者権限で操作ログを変更又は削除ができないことを確かめる必要があることを理解してほしい。

問3

問3では、IT投資計画の監査を題材に、IT投資計画におけるIT投資額の過小見積りや効果の検討不足、実行段階でのITコストの増大などのリスクに対する監査手続について出題した。全体として正答率は平均的であった。

設問2は、正答率が平均的であった。S社が開発する範囲とR社が開発する範囲の関係や見積り作業の実施状況から、リスクを識別し、監査手続を作成することがポイントである。また、監査手続の策定では、何を確認するのかだけではなく、どのような監査技法や監査証拠によって確かめるのかを示す必要があることを理解してほしい。

設問3は、正答率が平均的であった。S社との関係でR社の情報セキュリティ対策に漏れがないように支出額を適切に計上するためには、R社の情報セキュリティ対策に関する責任範囲が明確となっていることが前提であることを理解してほしい。

設問4は、正答率が平均的であった。社外からの人材を採用して新設されたDX推進室が独自に試算した利益率向上の実現可能性について、当事者である営業本部がどこまで確認しているのかが重要である点に気が付いてほしい。